

戦前期養老院における家庭的処遇の視点とソーシャルワーク

— 家族舎の活用とその今日的意義 —

○ 文京学院大学 氏名 鳥羽美香 (会員番号02910)

小笠原祐次 (社会福祉法人多摩同協会・00921) 岡本多喜子 (明治学院大学・00252) 中村律子 (法政大学・00795) 中村英三 (常磐大学・04368) 西田恵子 (常磐大学・01970) 仁禮智子 (岐阜県庁・06212) 曲田志保子 (松山東雲女子大学・01317) 福馬健一 (江戸川大学総合福祉専門学校・05983) 西村圭司 (江戸川大学総合福祉専門学校・07833) 張珉榮 (明治学院大学大学院・08381)

キーワード: 小舎制、家庭的処遇、養老院

1. 研究目的

昭和初期において、院内処遇は主に救護施設を中心に行われていた。その対象者は貧窮状態にある老衰者、病者、寡婦、幼弱者、障害者、失業者等であった。救護施設において老衰者のみを収容保護するのが養老院であった。大正時代末よりわが国にケースワークを紹介していた一人である小澤一は、昭和初期に養老院における小舎制の重要性について指摘している。小澤は、家族舎は単に設備に入園者を配置するだけではなく、そこには寮母を中心とした精神的結合が必須であると論じていた (小澤一 1934)。

既に孤児院の実践においては英国のバーナード・ホームを参考にした石井十次の岡山孤児院に家族舎の例等が見られたが、養老院における処遇は昭和初期においても集団処遇が中心であった。それは当時の貧困層の世帯が家族としての条件を備えておらず、一家離散などの状況下で救済保護するといった傾向が強く、家庭的処遇よりも衣食住重視の実践が殆どであったということも影響していると思われる。

しかしながら小澤は当時育児事業よりも軽視されがちな養老事業においても人間の生活に焦点を当てるべきと個別処遇 (ケースワーク) の重要性を指摘し、個別的処遇のためには家庭的な処遇環境が重要であると結論付け、浴風園において家族舎の実践を行った。

これらを踏まえ本研究では小澤の実践理念における個別処遇と家族舎中心主義に焦点を当てる。さらに小澤が養老院において個別処遇を行う際に小舎制 (=家庭的な処遇) を実践することの重要性を指摘し実際に浴風園において家族舎を運営していた事例を検討する。その上で当時の養老院の処遇における家族的処遇が必要とされた背景とその効果について検討する。

2. 研究の視点および方法

研究の視点としては以下の通りである。

- ・養老事業における個別処遇と家族舎の工夫

前述の通り小澤は院内救護事業については貧窮孤独の老衰者、病者、児童等を扱う団体事業であると位置づけながらも単に集団的に扱うのではなく個人的特質と要求を顧慮し個別化が必須であると論じており、個別化のためには小舎制が望ましいと述べている。本研究

の視点としては小澤が保護課長の職にあった（1929～1939）当時の昭和初期の浴風園（東京都）の事例をもとに、家族舎における個別処遇の実際を検討する。

研究方法としては以下の通りである。

- ① 浴風園の見取り図から園内における家族舎の位置づけについて検討を行う。
- ② 浴風園の1929年～1939年の事例を検討し、その中で家族舎における処遇の特徴を表した事例を分析する。

上記に加え、昭和初期に雑誌「養老事業」に掲載された寮母日誌抜抄より、浴風園の家族舎における処遇に関する事例を取り上げ分析する。

3. 倫理的配慮

浴風園入園者の事例を取り上げるがその際は個人が特定出来ないように匿名化し、事例を必要に応じ加工・修正して使用する。また、本研究は社会福祉法人浴風会に了解並びに協力を得て実施している。

4. 研究結果

研究結果としては以下の4点が挙げられた。まず図面をもとに家庭寮（家族舎）の位置づけを検討した。さらに事例をもとに家庭的な要素の分析をおこなった。その中では寮母との家族的関係性、寝食をともにする入園者相互の関係性、処遇目標としての「精神的慰安」に関して家庭的要素として挙げられた。以下①から④に添って分析を行う。

- ① 見取り図からみた家庭寮（家族舎）の位置づけ
- ② 寮母と入園者の家族的関係性について
- ③ 入園者相互の関係性について
- ④ 処遇目標の「精神的慰安」と家族舎について

5. 考察

設計に関しては小澤が浴風園の開設準備段階から相談を受け、関与したものである。浴風園本園の見取り図をみると、家庭寮（家族舎）は8棟あり、各棟は寮母室を中心にして左右に玄関があり、左右に部屋が2部屋ずつの構造である。各部屋10畳敷で6人定員、左右にそれぞれ食堂が置かれている。浴室は共有であるが左右が独立したユニットとなっており、個室ではないものの、各ユニット12人という人数的にも現在の特養等のユニットケアに近い構造であると思われる。また、共同生活をおくる疑似家族としての入園者と職員である寮母は親密な関係にあった。それは小規模な生活単位のみならず寝食をともにするという関係性の中で、小澤が目標とした精神的結合を意図した処遇がなされていた。

さらに入園者相互の助け合いや諍いなどのエピソードが事例により汲み取れた。

詳細な結果については当日資料を配布する。

文献

小澤一「実験上から見た養老事業の根本問題」『養老事業』4、1934、6p